

身体表現として見た1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為 ：保育所における保育者との相互交渉場面を焦点として

愛知教育大学大学院教育学研究科 発達教育学専攻 幼児教育領域
名和孝浩

キーワード：拒否・要求・調整，1-2歳児，相互交渉，身体表現，乳児保育

序章：研究の目的

本研究では、身体的な行為によって他者とのかかわりをもととする1-2歳児の実態を捉えるため、保育所の1-2歳児を対象に、内的心理状態が、どのような場面で、どのような身体の動きとして表現されるのかを検討することを目的とする。特に、保育所における1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為に焦点を当て、それらの行為を「身体表現」という観点から分析することを試みる。

第1章 問題提起と背景

1. 問題設定の意義

昨今、子どものコミュニケーション能力の不足¹⁾が言われるが、その育ちは乳児(0, 1, 2歳児)の頃から、身近なおとなのことば以外の行為によって、既に始まっている。相手の解釈に支えられながら、自分の思いを伝えようとするのが、他者とのかかわりの芽生えと捉えられる。コミュニケーション能力が、乳児期から積み重ねられていることは自明であり、乳児期からの他者とのかかわりを捉えることは、重要な意味をもつ。

保育者は、乳児のことば以外の行為から、内面を推し量り、読み取ることが必要になる。しかし、ことばが伴わないため、何を訴え、何を求めているかを、保育者が上手く掴めない。特に乳児の拒否する場面は、対応に困る場面として挙げられる²⁾。そのため、乳児のことば以外の行為に着目して、他者とのかかわりを捉えることに意義があると言える。

2. 本研究の理論的背景と用語の定義

2.1. 1-2歳児を対象とする意義

本研究で調査対象とする1歳児クラスは、満1歳から2歳10か月までの月齢の子どもが在籍するため、本研究では、限定的に1-2歳児と表記する。

1-2歳児は、それまでおとなに大きく指示されることで、ようやく成立していたコミュニケーションの関係から、次第に様々な手段を用いて、能動的にコミュニケーションに関与し始める。またこの時期は、他者とのかかわりにおいて、身体的な行為を用いることが多い。しかし、身体的なかかわりの場面では、保育者が1-2歳児の身体の動きから、上手く思いを解釈できずに、保育者と子どもの中に思いの「ずれ」が生じることがある。その

ため、1-2歳児の身体的なかかわりに焦点を当てることに意義があると考えられた。

2.2. 1-2歳児の動きを身体表現として捉える意義

他者とのかかわりにおける1-2歳児の身体の動きは、相手に思いが伝わるよう、すべて意図的に表されたものなのだろうか。身体の動きは、そのまま精神の動きであり³⁾、実際に身体的な動きでどのようにコミュニケーションしているのかを探るためには、意識的・無意識的なものを含んだ、まるごとのからだの活動⁴⁾を捉える必要があると考えられた。そこで、他者とのかかわりにおける1-2歳児の身体の動きを、内的な心理状態の表れとしての「身体表現」として定義して捉える。

本研究では、主にラバン身体動作表現理論を援用し、1-2歳児の身体表現を分析することにした。ラバン理論は、身体表現を数量的に分析する際に用いられており、乳幼児のコミュニケーションや、ヒューマンロボットの身体動作の分析にも利用されている。ラバン理論にもとづくことで、他者とのかかわりにおける1-2歳児の身体表現の特徴を捉えることができると考えられた。

2.3. 「拒否・要求・調整」行為を焦点とする意義

1-2歳という時期の子どもは、他者の促しや要求を拒否したり、自分の要求を主張したりすることで、能動的に自分の思いを伝えようとする主体として、コミュニケーションに関与し始める⁵⁾。そのため、1-2歳児の拒否・要求場面に焦点を当てることは、他者とのかかわりの芽生えとして、1-2歳児が積極的に自分の内的心理状態を表そうとする様子や、より豊かになる相互交渉の様相の検討が可能であると考えられる。また1-2歳児の拒否行動について、これまでの研究では、拒否行動の相互交渉の経過や結末など、意味のあるひとまとまりとして、どのような相互交渉があるのかについては十分に検討がなされていない。拒否する場面の始まりから結末までを、ひとまとまりとして捉えた場合、どのような形であれ、乳児と保育者とのやりとりは一応の決着がつくことになる。それを調整の場面と捉えることで、どのように調整に至ったかという視点から、拒否の内容や思いを、遡って検討できると考えられた。そこで本研究では、「拒否・要求・調整」場面という一連の相互交渉場面に着目することが有効であると考えられた。

第二章 1-2 歳児における保育者との相互交渉場を身体表現として捉える妥当性と観点の検討 (研究 I)

1. 目的

保育者との相互交渉場面における 1-2 歳児の身体の動きを、身体表現として捉えることの妥当性を検証し、身体表現として描き出すための分析の観点を検討する。ここでは、特に「拒否」する行為を対象とした。

2. 方法

対象は、岐阜県 A 市内の私立保育園 0, 1 歳児クラス (1 歳児 13 名, 保育士 6 名), 2013 年 10 月 23 日~2013 年 12 月 18 日までの期間の 9 回, 登園から午睡までの時間, 1 週間に 1 回の参与観察を行った。その結果, 「拒否」する行為は, 69 事例が収集された。

3. 結果と考察

3.1. 保育者との相互交渉場面において, 1-2 歳児は身体動きをどの程度使用しているのか

3.1.1. 拒否する行為の様態

保育者に対し, 「ことば」を用いず, 身体の「動作」のみで拒否をする様態が 36 例と最も多かった。拒否する行為が動作のみの様態で多く発現することが認められた。

3.1.2. 拒否する行為が発現した場面と頻度

生活場面で (22 事例), 遊び場面から生活場面への移行 (31 事例) で, 拒否する行為が多く発現した。保育者が生活習慣や生活上のきまりなど, その場での変更が難しい内容を要求することや, 遊びを中断もしくは終了させようとするのが原因となっていると考えられた。

3.1.3. 拒否する行為が起きた直前の事象

1-2 歳児の内面の読み取りとして, 何に対して拒否が起きたかを見るため, 拒否する行為の直前の事象を分類した。その結果, 「保育者のその子どもに対する指示」「保育者の注視の移行及び休止」「保育者のその子どもを含めた全体に対する指示」「他児の拒否する行為」「他児の生活の流れに沿った行為」の 5 つに分類された。「保育者のその子どもに対する指示」が 56%であり, 約半数の拒否が保育者の直接的なやりとりによって起きていることが認められた。

3.2. 身体表現として描き出すための分析の観点

ラバン身体動作表現理論を基に, 運動の成立要因「力性」「空間性」「時性」「身体の形態 (部位, 動き)」という観点を用いた。「力性」とは, 動きの強さを示し, 「強い, 弱い」「重い, 軽い」を区分した。「空間性」とは, 身体の動きをもとにした広さや方向や高さを示し, 「移動の有無」を観点とした。「時性」とは, 動きの速度やその組み合わせを示し, 「くり返しの有無」に着目した。くり返しとは, 動きの強弱長短が時間的なひとまとまりとなって 2 度以上行われることを示す。

この観点と拒否する直前の事象との関連を捉えた結果, 1-2 歳児は身体の動きを身体表現として捉えられることが概ね確認できた。

第三章 「拒否・要求・調整」行為を身体表現として描き出すための分析シートの作成 (研究 II)

1. 目的

第二章の結果を基に, 1-2 歳児の「拒否・要求・調整」行為を捉える観点と基準を作成し, 有効性を検討する。

2. 分析の観点と基準

直前に起きた事象	身体の動きが発現した直接的な原因を探るために, 「拒否・要求・調整の直前に起きた事象」という項目を設けた。
身体の形態・身体動きと身体部位	身体の動きと身体部位: 記述した事例に基づき, 身体の動きを区分して示した後, その運動のために用いた身体部位を記述した。 ラバン理論の身体部位の基礎区分を基にしながら, 1-2 歳児が動かす身体部位を, 頭, 肩, 肘, 上肢, 指, 胸, 腹, 背中, 体幹, 膝, 下肢, に区分した。1-2 歳児の身体部位の特徴として, 上肢や下肢が短く, それほど器用ではないためか, 例えば膝・足首・爪先などが連動して動くことが多かった。そのため, 腕全体が動いた場合を上肢, 脚全体が動いた場合を下肢, 上半身全体が動いた場合を体幹とまとめた方が, 動きを表すのに適していると考えられた。
力性	ビデオの映像を用いることで, より詳細に動きを分析できるようにし, 動きの強-弱を 5 段階で数値化し, 動きが強くなる程数値を大きく, 弱くなる程数値を小さくした。
空間性	「移動の有無」「移動の経路」「保育者との向き」「姿勢の前後の重心」と「姿勢の左右の重心」「姿勢の高さ」の観点を設けた。 「移動の有無」に加え, 「移動の経路」によって, 移動の仕方を探れるようにした。保育者と対面になる場面や, 逆に背を向けて離れる場面では, 動きや意図が変化するものと考えられ, 「保育者との向き」を加えた。また研究 I で, 「自分の重心を後ろ寄り」にすることで, 保育者に連れて行かれないようにする」など, 重心を意図的に変える動きが目立ったため, その程度や向きを観点の一つとした。「姿勢の左右の重心」は, C を中心, 大きく右寄りが RR, 右 R, 大きく左寄りが LL, 左寄りが L で示した。「姿勢の高さ」については, 研究 I で「身を屈めて離れる」などの意図的に姿勢を変える動きが抽出され, 対象児の意図を読み取る上で, 必要な観点と考えられた。うつ伏せや仰向けの状態を指す臥位: 1, 順に座位: 2, 膝位: 3, 立位: 4, 伸長位: 5 の 5 段階に分けた。
時性	「遊戯性」を示す可能性のある「くり返し」を, ビデオカメラを用いることで, 捉えられるようにした。「動きの速さ」は, 5 段階で数値化する。「動きの頻度」は「くり返し」といったリズムのあるまとまった動きの他に, 「単発的」「連続的」「持続的」かを区分することで, 「くり返し」の観点だけでは捉えられなかった, 「より強い拒否の動き」なども捉えることができると考えた。
拒否・要求・調整の区分	身体の動きが拒否的なのか, 要求的なのかを区分することで, 内面的な心理状態がつかめるのではないかと考えられた。そこで分析シートでは, 「拒否: 拒否的な身体の動き」「要求: 要求的な身体の動き」「拒否と要求: 拒否的と要求的の両方と捉えられる身体の動き」の, 3 つに区分できるようにした。またどのように調整に至ったかという視点から, 「調整・調整的な身体の動き」を設けた。

3. 分析シートの検証

3.1. 事例収集の方法

岐阜県 B 市内の私立保育園 1 歳児クラス (1 歳児 19 名, 保育士 4 名) で, 2014 年 5 月 13 日~2014 年 10 月 28 日までの期間, 全 16 回, 9 時から 12 時頃までの登園後の自由遊びから給食までの場面で, 月に 2, 3 回程度, 参与観察を行った。観察は筆記による記述とともにビデオ撮影を行い, 観察終了後, 逐語的に記録した。

3.2. 分析シートの有効性と課題

分析シートの有効性と可能性は以下のようにまとめられる。第 1 に, 対象児の動きを詳細に分析することによって, 対象児の内面を説明でき, それを予測する根拠が得られる可能性が認められた。第 2 に, 同一児の身体の動きの変化を内面の変化として読み取ることができたため, 発達のな変化を捉えられる可能性が認められた。第 3 に, 保育者の感覚的な捉え方でなく, 一定の基準に依拠して身体の動きを描き出すことで, 内面の変化や推察の裏付けとなり, 保育者が何によってそう感じられたのかを探ることできる可能性が認められた。

ただし、本分析シートを用いる際には、身体の動きが直接的に言葉の置き換えではないことを念頭に置く。法則性を重視しすぎて、事例の具体性を捨象しないようにしたい。単純に行為を抜き出すだけでは捉えきれない身体の動きの詳細や、動きが発現する原因を探りつつ、事例の文脈から切り離さずに解釈する必要がある。

第四章 身体表現として捉えた1-2歳児の「拒否・要求・調整」の特徴（研究Ⅲ）

1. 目的

身体表現として捉えた1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為の特徴を明らかにする。

2. 事例収集方法と対象とした事例

対象、期間、方法は第三章（研究Ⅱ）と同様である。なお、観察期間中の対象児の月齢は、1歳5か月～2歳2か月であった。保育者の要求を拒否した場面から保育者とのやりとりが終了した（調整に至った）と捉えられた場面までをビデオで撮影できた事例とした。また「拒否・要求・調整」が身体に表れたもので、かつ、その内容が比較的短時間のなかで解決したと捉えられたものを分析の対象とした。その結果、50事例が抽出できた。

3. 結果と考察

研究Ⅱで作成した分析シートを用いて、1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為の特徴を分析した。図1は、「I）a」として分類された事例の分析シートと解釈の一部である。全事例に対して、このような分析を行い、動きの詳細を分析することで、行為の解釈の裏付けとした。

その結果、3つの場面に分類できた。また場面ごとに、身体表現として捉えた1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為を、同一もしくは類似する行為ごとに分類した結果、7つのタイプに分類できた。以下、その特徴を述べる。各特徴の考察は、該当する事例の「分析シート」→それをもとにした事例における「対象児の内面の省察」→（分類された複数の事例の共通点としての）「拒否・要求・調整」行為の特徴、という流れで進めた。

場面Ⅰ）保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通ったことで調整に至る場面

a: 拒否の動きを表すことによって、より拒否が強まり、保育者が要求に応えた

1-2歳児の拒否は、身体の動きが強まることで、より拒否の思いが強まると捉えられた。保育者は、子どもの拒否の動きの強まりに何らかの対応せざるを得なくなり、子どもの要求におもわず沿ってしまう。それによって、子どもは調整に至る。

b: 保育者の要求的な意図に拘わらず、自分の欲求を満たそうとする動きを続けることで、結果的に自分の欲求を叶える

保育者の要求に対して、子どもは保育者の意図とは無関係に、強い身体の動きで拒否を続ける。保育者が子ど

分析シート		対象児の内面の省察		区分			
「ぼくの番はまだ!？」カズキ(1歳9か月) 乳母車で散歩から戻る。保育者に袖をめくってもらった子どもから順に、乳母車から降りてもらい、手を洗いに行く。A先生がカズキのところに来て、服の袖をめくる。カズキはA先生を見るが、A先生は他の子どもの袖をめくる。①乳母車の手すりに握まり体を上下に揺すり、「ウワー」と泣き声を出す。A先生が他児を降ろそうとすると、②さらに体を揺らすと、泣き声も大きくなる。A先生は他児に「ちょっと待ってね」と言葉をかけ、先に降ろすのを止める。③カズキはA先生に降ろしてもらおうと、自分で水道へ向かう。		①の動きは、カズキの袖をめくったのに、A先生が他児の方へ行ってしまうことで、強度:4、速度:4という身体の激しい動きで「他児のところへ行かず早く降ろして」という「拒否と要求」の思いが表われたと読み取れた。		拒否と要求			
		②の動きは、A先生が他児を降ろそうとしたことで、強度:4→5、姿勢の高さ:2→4と、速度:5と、身体の動きが激しくなった。泣き声も大きくなり、拒否の思いが強まったと読み取れる。		拒否と要求			
		A先生は他児を降ろすのを途中で止めて、カズキの要求に応え、先に③カズキを乳母車から降ろした。A先生に抱えられると、強度:1、速度:1と、動きが一転して収束する。カズキは手洗いへと進んでおり、この動きによって「調整」に至ったと捉えられた。		調整			
形態	力性	空間性		時性			
動き	部位	強度	重心:前後	重心:左右	高さ	速度	頻度
①	上肢	4	3	C	3→4	4	小刻みに連続的
②	上肢	4→5	3	C	2→4	5	小刻みに連続的
③	上肢	1	3	C	4	1	単発的

「拒否・要求・調整」行為の特徴	
①	保育者の援助に対して拒否の思いを表す
②	自分の要求が通らず身体の動きが強まる
③	保育者が子どもの要求に応えることで調整に至る

図1 I) aとして分類された事例の分析シートとその解釈(抜粋)
 一重下線部は「拒否・要求・調整行為の直前に起きた事象」、○で囲んだ数字と二重下線部は「身体の動き」を示している。

もの動きを止めようとしても、身体の動きが変わらない様子が見られた。保育者の意図を感じているとは読み取れず、保育者からは交渉的とは捉えられない動きである。結果的に、保育者は当初の要求を通すことを諦め、子どもの拒否と要求がほぼ通ったかたちで調整に至る。

場面Ⅱ）保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通らないが調整に至る場面

c: 新しい欲求が生まれた瞬間に、身体の動きが切り替わり、調整に至る

自分の要求が通らない場合でも、新しい欲求が喚起することで、身体の動きが切り替わり、自発的に次の活動へ向かうことで調整に至る。また、新しい欲求が生まれる要因には、他者(保育者、他児)の行為やモノという状況の違いが見られた。

d: 保育者との身体的密着により、徐々に調整に至る

自分の欲求が満たされなかった場合、保育者との身体的密着を求めたり、自分から保育者との身体的密着の度合いを調整したりしながら、1-2歳児なりに能動的に調整に向かおうとする。身体的密着を半ば強要するかたちで継続されるため、保育者にとって扱いにくいと感じる場面でもあるが、身体的なかかわりを通して、より絆が深まる場面である。

e: 保育者との身体的密着そのものが目的に変わり、調整に至る

自分の欲求が満たされない場合、保育者に抱かれることによって、保育者との身体的密着が目的に変わり、その動き自体が調整になる。パターン d「保育者との身体的密着により、徐々に調整に至る」とは異なり、自分から保育者との身体的密着を求めていく動きは捉えられなかった。保育者との身体的密着により、すぐに気持ち切り替わることから、それまでに築いた保育者との親密な関係をもとに調整に至る。

場面Ⅲ) 拒否自体が目的の場面

f: 保育者の要求に対して拒否をすることが目的

保育者の要求を拒否することで、保育者の動きを誘い出し、かかわることで調整に至る。大げさな動きやリズムミカルな動きが特徴的に捉えられた。また逃げた後で保育者を覗き込むような保育者の応答を期待している様子が見られた。拒否的な情動は伴わず、保育者とのやりとりを楽しんでいる様子が身体の動き自体に表れている。

g: 他児の拒否に同調して、追従することが目的

他児が始めた「拒否」に誘われ、他児の拒否に身体的に同調し、追従することで、自分も保育者の要求を拒否する。他児の動きが拒否のきっかけになっている点で、保育所特有である。保育者の様子を見るなど、保育者の要求や、その場の状況を意識しつつも、他児の動きに魅力を感じ、身体的に同調し追従することで、他児とのつながりを感じて調整に至る。拒否後、保育者が誘いかけると素直に応じるといった様子も見られた。同調し、追従しているのはあくまで身体的な動きであり、他児の拒否の思いまでは同調していないため、調整に至る過程が他児とは異なる場合がある。

第V章 総合考察

1. 保育所における 1-2 歳児の他者とのかかわりにおける身体のもつ力

身体表現として捉えられた「拒否・要求・調整」行為の特徴をもとに、1-2 歳の他者とのかかわりにおける「身体がもつ力」とはどのようなものなのか、以下、3つの力について述べる。

1.1. 自分の思いに気づくことができる身体の力

1-2 歳児の「拒否・要求・調整」行為では、身体の動きを強く表すことで、拒否が強まることや、保育者の意図に拘わらず、とにかく欲求を満たそうと動き続ける様子が見られた。これらは「拒否・要求・調整」の身体の動きを表すことで、自分の欲求を増幅させているのではないかと捉えられた。身体の動きで表すことが、自分の思いに気づききっかけになるのではないかと捉えられた。また、身体の動きで表すことで、自分の不安定さが際立ち、かえって混乱し、「わけがわからなくなる」という状態が生まれることも捉えられた。このように、身体の動きによって自分の欲求に気づいたり、逆に自分でも行為の目的が分からなくなったりという、双方の状況が生ま

れる。1-2 歳児の他者とのかかわりにおいて、身体の動きが、他者へのアピールだけでなく、自分の思いに気づいていく手段としても使われていることが捉えられた。

1.2. 遊戯的な思いを表わす身体の力

1-2 歳児の「拒否・要求・調整」場面では、直接的な拒否の思いのみが身体で表されるだけではない。身体の動きによって「ふざけている」ことが伝わったり、保育者の応答を誘い出そうとしたりするような、婉曲的な拒否の動きも見られた。拒否の思いが伴わないこうした「拒否・要求・調整」行為は、普通ではやらないような非日常的な動きであり、保育者に親しみや好感を抱かせ、笑いを誘うような、遊戯性を感じさせると捉えられた。1-2 歳児の身体の動きが他者とのかかわりの緩衝材となっており、柔軟性のある人間関係を築くことのできる柔らかい身体をもち合せていることが分かった。また、保育者には子どもの柔らかな身体に伝えるだけの、高い身体性が求められると考えられた。

1.3. 心地よさを感じることでできる身体の力

「拒否・要求・調整」行為の特徴から、拒否する目的が、他児との身体的な同調であることや、保育者との身体的密着へと目的が切り替わり、調整に至る様子が見られた。これは、1-2 歳児が他者との心のつながりを、身体的な同調や密着という、他者とのつながりを感じる心地よさによって起こると捉えられた。1-2 歳児の「拒否・要求・調整」行為では、心地よさを感じる身体の動きそのものが、自分の内面と他者との関係に調整をもたらすきっかけになっていると考えられた。

2. 本研究の意義と今後の課題

1-2 歳児の「拒否・要求・調整」行為を、内面の表れとしての身体表現として捉えた結果、1-2 歳児の身体のもつ力が考察され、保育における示唆を得ることができた。今後は、「拒否・要求・調整」行為の発達の変化や、保育者の援助の視点や有り様を探っていきたい。

主な引用文献

- (1) 文部科学省中央教育審議会答申 (2005) 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について
- (2) 古賀松香 (2011) 1 歳児保育の難しさとは何か. 保育学研究. 49 (3). 8-19
- (3) 石塚雄康 (1982) からだとことばのイメージ—身体表現—. 青雲書房. 9-10
- (4) 柴眞理子 (1993) 身体表現—からだ・感じて・生きる—. 東京書籍. 93-94
- (5) 川田学・塚田みちる・川田暁子 (2005) 乳児期における自己主張の発達と母親の対処行動の変容. 発達心理学研究. 16. 46-58